

北村西望の「石膏直付け法」における近代塑造技法の転換点

土方 浦歌 (井の頭自然文化園彫刻園)

北村西望(1884-1987)は、大正初期から昭和期にかけて、文展と帝展を中心に活躍した近代彫刻家であり、朝倉文夫、建畠大夢とともに「官展アカデミズム」のひとりと言われている。1900年初頭日本に伝播したロダンの影響を受けて、動的な筋肉の隆起を誇張した男性裸体像を、東京美術学校在籍中から文展で発表し彫刻家としての地歩を築いていた。写実的で勇壮な男性裸体像は、昭和初期には健康美の模範として銅像になり、公共彫刻の依頼が相次いだ。1921年三宅坂の《寺内正毅元帥騎馬像》を皮切りとして、当時最大の《児玉源太郎大将騎馬像》を1938年満州の新京に建設している。このような騎馬像制作は、石膏のひな型を完成予定の銅像と同じ寸法まで拡大し、鉄の骨組みや木枠を内部に入れた石膏原型を、職人と共働して制作する試行から成立していた。

太平洋戦争中北村西望は、石膏と粘土の不足から、木枠の骨組みの表面に石膏を塗布して、石膏原型を彫刻家自らが制作する「石膏直付け法」を考案した。それは、造形が粘土から始まるのではなく、木枠の設計から始まり、石膏の塑造の後一旦固まった石膏を削り取り、塑造と石彫の技法を融合させたものであった。これにより、戦前から石膏原型は展覧会に出品されていたが、彫刻家によるオリジナルな作品となった。自伝では疎開中に制作した1945年の《薬師如来像》が「石膏直付け法」の最初の作品であった。このたび修復により精査した1943年の《和気清麻呂》にも、心木が内部充填物を支えており、表面に削りとった跡が確認され、すでに「石膏直付け法」の予備段階が認められる。そして1955年に長崎の平和公園に依頼された《平和祈念像》同寸大の石膏原型の制作には、型紙から起こして曲線に切り取った木組みと、その上に張られたアンペラ、さらにその上に石膏を塗って、鑄造のために104個のブロックに分解できるようになっていた。

1980年以降になってから、北村西望は自身の彫刻の造形理論は、自然界の構造と、動的な肉付けに基づくと述べている。戦後、抽象表現主義が欧米から入って以降も、日展では人物具象がひとつの分野として継続され、国際潮流から外れたものと見なされてきた。しかしながら、北村西望の制作プロセスにおいては、純化された形態を彫刻の内部構造として設計しており、短時間で固化する石膏の可塑性を、グリーンバーグの言うところの固有のメディウムに特化した即興性のある表面の造形として制作に取り入れていた、と考えられる。このように、人体像の外側からは窺えない、彫刻の内部構造に近代彫刻史の展開との呼応が見られ、これは、当初技法上の必要から生じたものであったが、次第に造形理論として変遷を遂げていく過程を考察したい。